展景

季刊

No.103

Autumn 2021

季刊　展景 103号

目次

こども食堂〈短歌〉……布宮慈子　4
ままならぬ〈短歌〉……市川茂子　6
徒手空拳〈短歌〉……梅津純子　8
隔たり　または距離感〈短歌〉……大橋千佳子　10
アフタヌーンティー〈短歌〉……小野澤繁雄　12
ブラインド アスリート〈短歌〉……河村郁子　14
凌霄花〈俳句〉……新野祐子　16
〈那須通信 48〉この感動に……加藤文子　18
〈薫風颯々 23〉一文字三星……神村ふじを　22
〈スイスからの便り 3〉スイス家庭事情の変遷……ギンジック恭子　28
対詠　ごきげんいかが？ PART 79……小野澤／布宮／河村　34
前号作品短評A……36
前号作品短評B……39
無二の会短信……42
編集後記……48

今号のイメージ／サツマイモ

こども食堂

布宮慈子（やすこ）

熱量をもちゐし人を失ひてわれらのこども食堂　雨降り

正義感の塊のやうだつたあなた斃（たふ）れてはいけない人でありしが

赤い車に出合ふことなし　姉御肌とふ形容が似合ひし人の

携帯に今も残る着信履歴あなたと話した最後の声す

一年を過ぎても穴は塞がらずCOVID-19が追ひ討ちかける

心配な子たち居たよね東京の団地にも　憂ふるだけの私たちだつた

あの時こども食堂があつたならウチも行けたしみんなも行けたね

こども食堂は地域食堂　再開のめどが立つのはいつか考へてゐる

いまこそは皆が読むべし湯浅誠の『つながり続けるこども食堂』

お日さまはきつと出てくるいつまでも雨に打たれてゐるわけにはいかず

ままならぬ

市川茂子

短冊に今の願いを一つ書き吊るす竹の葉萎えてゆくなり

大空に君の手を取り飛び立ちて天の川に入る明け方の夢

命とはかくなるものか年重ね安きにありて目覚め危ぶむ

起き抜けにテレビつければコロナ禍の感染の数テロップに出る

時早く過ぐとう詩人ならずとも老いゆくわれの時はいつまで

葱一本買い足す独りの夕餉にてスキヤキモドキと呟きながら

消費するくらしを時に疑いて自給自足の昔を思う

ケーキなく手近にわが家の赤飯で祝う今年の彼女の誕生日

ままならぬこの世と思う独白（モノローグ）を空に放ちて八月を過ぐ

路地裏に高く伸びたるさるすべり真紅の花をかかげて静か

徒手空拳

梅津純子

朝光に白き水脈（みを）曳き進みゆく「スイム」の選手ら点となりつつ

空からのカメラが映すお台場に泳者は白き水脈を曳きゆく

今生のチャンスなりせばトイレ臭と言はれし水にもアスリート競ふ

辺り裂く女性の気合空手「形」裂帛（れっぱく）といふ言葉かへり来

武器持たぬ琉球に生るる護身術空手の演武に心身の覚む

かくまでも五体は研がる空手「形」手足の動き目にも留まらず

八方の仮想の敵と対峙する徒手空拳の五体を研ぎて

侵すなく護らむ備へ怠らず沖縄の空手「九条」に重ぬ

はかり知れぬ努力の頂競ひ合ふ選手に打たるコロナ禍なれど

「無観客」に熱狂のなくテレビ観る独りのほてりデルタ株に冷む

隔たり
または距離感

大橋千佳子

若さとはかくなることや十八の喉流れゆく昼のそうめん

ＳＮＳ駆使する子らに授業するＷｏｒｄ文書は古文の如し

ウイリアム・モリスのレターブック繰る展覧会も生地屋も遠く

「巣ごもり」は無敵の言い訳手習いに予約しましたロックミシンを

幼子のスープに浮かべし「お星さま」オクラ丸ごと出汁で煮る好し

人参は葉列しなやか除草する我が手小さな虔十（けんじゅう）になる

熱戦のユニフォームには国旗あり選手が背負いきたもの思う
（パラリンピックをテレビ観戦）

比べない、比べまいを経てそこに立つパフォーマンスは強くおおらか

健常と障害の区別乱暴健常という違和感を生く

縄文の遺骨に瑕疵（かし）の四肢もあり彼ら寿命を全うせしと

アフタヌーンティー

小野澤繁雄

アフタヌーンティーに大切はいっしょに飲むことそれのほかはどうでも
「あいさつはかえってくるとうれしいな」町内は掲示板に残って
犬がいたことでしる家に人までがいなくなってまだその家をしる
学校に女先生というやさしさは覚えあるごとしきびしさもまた

雨上がりまちを歩いて共通の体験として雨そんな思いが
羽黒社をしる人少な直登をする長階段を下りてきた人
破れ紙の吹かれて下る白鷺や大きくされて水田そのなか
お兄ちゃんたちそれはなく子どもたちそれも違ってただ若いひと
死んだ人は咳もしないから葬儀もできるとそんなことが云われて
市内（まちうち）は徒歩圏の店に喫茶店名をトワトワト今もあるのか

ブラインド アスリート

河村郁子

おお神様　旧約聖書創世記に「光あれ」と言ひ給ひける
「光あれ」のひと言に「光あり」て光と暗(やみ)とを分かち給へり
地上には光あまねき草木も鳥獣それぞれ生命(いのち)はぐくむ
「人獨(ひとり)なるは善(よ)からず」と　おお神様　エデンの園に男女(なんによ)ととのふ

産まれ来し数多(あまた)の人間(ひと)に神様はみ光恵まぬ人間(ひと)を創れり
二〇二一年パラリンピックが催され光なくとも選手はつらつ
おのおのが長き試練の隧道(ずいだう)に捉へし理想を実らせにけり
音のみを頼みて挑む「ゴールボール」の一球ごとに心揺さぶらる
補助となる器具も用具も少なかるブラインド競技に思ひの募る
当然と思ひきたりしわが視力　老いても当然、補ひゆかな

凌霄花

新野祐子（にいの）

日雷（ひがみなり）まれに自制心湧いたとき

撒水車（さんすいしゃ）よぎり言霊よみがえる

どう救う蝙蝠の子の地に落ちて

日盛やいよよ馴染めぬ電子音

夕立来て湯気ぼうぼうと沃土（よくど）あり

わたくしの覚醒として凌霄花（のうぜんか）

山滴るクロジ美声をなお磨き

黒鴨林道を行く　三句

山道にカモシカ子グマ　除草剤

草いきれ毒をかけられ絶え果てぬ

殺草剤のえじきとなるや大夏野

〈那須通信48〉

この感動に……

加藤文子

昨夜からの大雨がやんで、今日は晴れ。

朝カーテンを開けた時、盆栽の並ぶ棚の様子が目に入る。ななめに射した光の帯にクローズアップされて、水気を含んだ木々や野草が輝いている。

朝食もそこそこにカメラを持って外に出る。光に導かれるように庭を巡りシャッターを切る。

手裏剣やルイ・ヴィトンを連想してしまうクチナシ色の山ボウシの花がくっきりと、エレガントに開いている。

小さな鉢の中で育つ樹高四十センチほどの細い幹の上方で咲く花は、特別な感じがする。光がそそがれて、いっそう際立っている。

温室の通路伝いの低い棚では、紫ニガナの黄花が長く伸ばした茎の先端で、花火のように色彩を散らす。うす暗い中で光が届く花々だけが映し出されていて、明暗が印象的だ。

温室入口近くのスタンドで放射状に枝をひろげる山モミジ。風の仲立ちか、ある時ゼンマイの株のあいだから芽を出して成長したものだ。うっすら赤く縁どられた萌黄色の葉が行儀よく並んで、初夏らしい趣を添えている。共生して三十年近くになるが、今ではゼンマイの方が遠慮がちにみえて、家主がどちらなのかわからない。

それぞれを心が描写したようには撮れないのだが、この感動に近づけたい一心で、何度もレンズをのぞいてシャッターを切る。

背景がじゃましないように考えながら、私が美しいとキャッチしたレンズの中の植物を追いかける。光が変わる前に、集中力が萎える前に、ハァハァ言って撮っている。

ファイルした中から月に一度更新するホームページに載せたり、毎年制作するオリジナルカレンダーに使ったり、稀にではあるが展覧会の案内状になることもある。

デジタルカメラを使うようになって、フィルムを入れて撮るという動作も遠い記憶になりつつある。慣れるのに時間のかかった新しい出合いも、いつの間にかあたり前のことになっている。

ヤマボウシ　ブローチにしたい　　撮影：加藤文子

〈薫風颯々23〉

一文字三星

神村ふじを

原稿に向き合ったときに、コロナから書き出してしまう自分にうんざりしてしまう。が、教育委員会に勤める身としては、コロナの感染状況が気になってしょうがない。

山形県の9月15日現在の感染状況は、新規感染者が7名で県内累計感染者数は３４５０名となった。

全国的に見ると、東京都を含む13都府県に出されている緊急事態宣言、16道県に出されているまん延防止等重点措置が9月30日まで延長されることになった。

小中高校生の発症は約3割に上り、学校や放課後児童クラブでクラスターが発生している。急速に若い世代に感染が広がりを見せているので、気の抜けない日々が続く。

明るい話題がない中で、何かぞくぞくするような話題はないものかと探していたら、来年のＮＨＫ大河ドラマの収録が進んでいるというニュースを見つけた。

何でも題名は「鎌倉殿の十三人」。脚本は三谷幸喜というのだから、「真田丸」以来ということになる。今回も楽しませてもらえるに違いない。

今回のドラマの主人公は、鎌倉幕府の二代執権北条義時。野心とは無縁だった義時が源頼朝との出会いをきっかけに政治の表舞台に登場し、武士の最高権力者へと上り詰めていく姿を描く。主演は小栗旬。コロナ禍の中にあってこのわくわく感は大事にしたい。

「鎌倉殿の十三人」は「鎌倉十三人衆」のことで、源頼朝の死後に発足した鎌倉幕府の集団指導体制を意味し、構成メンバーは大江広元（おおえのひろもと）、三善康信、梶原景時など公家、武将合わせて13人。１２２５年（嘉禄元）に設置された評定衆のもとになったとされる。

鎌倉幕府において、政所の別当であった大江広元は重要な位置を占めている。ここで大江氏と我が町大江町のことを記してみたい。

私の住む山形県大江町は、１９５９年（昭和34）８月に左沢（あてらざわ）町と漆川（うるしかわ）村が合併して誕生した。合併するにあたって、新町名を大江町にしたが、この「大江」には二つの意味があったと言う。

漆川村の山々から流れ出る小河川が左沢で最上川に合流し、大河となって日本海に注ぐ。その勢い盛んな様をイメージして「大江」という字を用いたことが一つ。源頼朝が鎌倉幕府成立に功あった大江広元にこの地（寒河江荘（さがえのしょう））を与えたため、大江氏の支配の地ということで「大江」としたことが二つめの理由である。（新町名の命名を依頼された当時の安孫子藤吉知事は、合併申請書の中

の新町の名称及び選定の理由の中で、前者が本義であるとしている）

１１８９年（文治５）、奥州藤原氏が滅びると、関東の御家人が各地の地頭に任命され、大江広元に寒河江荘が与えられることになった。

大江広元は、源頼朝の側近として重用され、鎌倉幕府の中心的存在だったため、実際に寒河江荘で地頭の役割を果たしていたのは、広元の妻の父多田仁綱（ただのりつな）であった。

１２１９年（承久元）、鶴岡八幡宮において、鎌倉幕府三代将軍源実朝が二代将軍頼家の遺児公暁（くぎょう）に暗殺される事件が起きる。

広元の嫡男親広（ちかひろ）は、弟時広らとともに参拝の先導役を務めていたが、その責任を取って即刻出家している。

しかし、幕府はまもなく親広を京都守護職に任命し、実朝の死後、幕府との対立が見え始めた後鳥羽上皇を牽制する役目を担わせていた。

１２２１年（承久３）、後鳥羽上皇が討幕の兵を挙げる（承久の乱）と、親広は上皇から「鎌倉方でいるか、味方となるか」と迫られ、やむなく上皇方に加わったと言われている。

この時、父広元と親広の子佐房（すけふさ）、弟時広は鎌倉にあり、幕府側についている。

頼朝の妻北条政子を中心に幕府の重臣たちがひと固まりとなり、防御の陣を敷くよりも京都に攻め入る方が得策との決定がなされた。

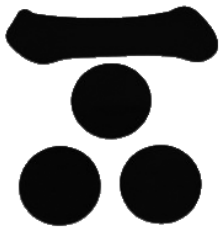
親広をはじめとする上皇方が宇治川で幕府軍を防ごうとした瀬田の戦いで、上皇方の劣勢が決定的になると、親広はわずかな家臣とともに、近江の関寺からおそらく若狭か越前に出て、日本海を北上し出羽に入り、最上川を遡って寒河江荘に来たとされている。（寒河江市史上巻）

それ以来、最上氏に滅ぼされる約４００年もの間、大江氏が本町の大部分が含まれる寒河江荘を支配することになる。

大江氏の家紋は「一文字三星」。「渡辺紋」と呼ばれるポピュラーな紋の「一」が頭に上がったものである。

「一文字三星」の「三星」は、古来、日本にあった星に対する信仰に基づくものであり、オリオン座の中央に並ぶ三つの星（大将軍星と左右の将軍星）をデザイン化したものと考えられている。

また、「一文字」は、数詞のはじめの文字であることから、位の高さを示していると言われる。



時代は違うが、長州の雄毛利元就（もうりもとなり）の家紋といえば、一の字に三つの丸、いわゆる「長門三ツ星」であり、大江氏の紋と同じである。

「矢も三本集まれば折れない」という三本の矢の有名なエピソードがその由来だと思われているが、実際はそうではないらしい。

というのも、元就の時代には、すでに家紋として用いられていたという理由からである。それに、亡くなる直前、嫡男の隆元ら三人の子を枕元に

呼び寄せ、一本の矢では軽く折れるが三本の矢を束ねたら容易に折ることができないと諭したという逸話そのものが、すでに隆元が早世していたことからして事実とは異なっている。

ただ、元就自身は、一族が結束すべきことを遺言状で述べており、三矢の教えは、そのようなことをヒントにして後に創作されたものというのが大方の見方である。

毛利氏の家紋と大江氏の家紋が同じ。どのような理由からなのか調べてみたくなり、痛快なことに毛利氏の家系をたどれば一目瞭然であった。

大江広元の四男の季光（すえみつ）は兄たちと同様に父広元から所領を受け継いでいるが、その受け継いだところが相模国愛甲郡毛利荘（現在の神奈川県厚木市毛利台周辺）であった。

季光は１２４７年（宝治元）、宝治合戦（執権北条氏と有力御家人三浦氏の対立抗争事件）に際して、三浦泰村（やすむら）に与（くみ）して三人の息子とともに敗死。しかし越後国佐橋（さはし）荘（現在の新潟県柏崎市）と安芸国吉田荘（現在の広島県安芸高田市）を所領とした季光の四男毛利経光（つねみつ）は、この乱に関与しなかったため、その子孫が越後毛利氏と安芸毛利氏となり、それぞれに分かれて存続した。

安芸毛利氏は、経光から吉田荘を譲与された四男時親が、南北朝時代の初期に吉田郡山（安芸高田市吉田町）に移住して居城を構えたのに始まる。吉田荘に移った安芸毛利氏は、室町時代に安芸の有力な国人領主として成長し、山名氏および大内氏の家臣として栄えた。戦国時代、毛利元就が出ると一代で大内氏や尼子氏を滅ぼしてその所領を獲得し、最盛期には山陽道、山陰道10ヵ国と九

州北部の一部を領国に置く最大級の戦国大名に成長した。

このようなことから、大江氏の「一文字三星」と毛利氏の「長門三ツ星」が見事につながった。目から鱗である。

身近なところに大江を名乗る方々がいる。特に神社仏閣に関わっておられる方が多いのも特徴的である。その人たちは今も「一文字三星」の家紋を使っている。大江氏の庇護の下に、あるいはその後の最上氏との関係においても共生協調して生き抜いてこられたのだろう。

また、毛利さんも何人かいて、普通に一町民として暮らしておられるのだが、調べてみると家紋は「一文字三星」。「長門三ツ星」の流れを汲むかどうかは定かでないが、実に歴史の不可思議を目の当たりにした。今に息づく「一文字三星」の家紋であった。

参考文献：「寒河江市史上巻　原始・古代・中世編」（１９９４年5月、寒河江市）
大江町誕生60周年記念誌「ふるさと発見　大江」（２０２０年2月、大江町教育委員会）
大江町歴史副読本「ふるさとの歴史」（２００１年3月、大江町教育委員会）

〈スイスからの便り 3〉

スイス家庭事情の変遷

ギンジック恭子

森を軽くジョギングするのが習慣になっている。森に行くまでに少し歩くのだが、その途中で、時々乳母車を見かける。それを押しているのは、たいてい初老の女性か男性。時に、若い男性のこともある。それを見ると、スイスもずいぶん変わったなあと思う。

その昔、息子が赤ちゃんだった頃は、乳母車を押して散歩しているのは、たいてい若い女性だった。かくいう私も、そういう母親の一人だった。もう30年ほど前になる。当時は、結婚して母親になると、たいていの女性は家庭に入ったものだ。

スイスに来たばかりの頃、ひとつ強い印象を受けたことがある。それは、父親ひとりの収入で家計が成り立っている家庭が多いということだった。もちろん、私の知る限りではということで、一般化はできないかもしれない。ただ、ある意味で、豊かな国なのだなあと思ったことは確かだ。しかし、女性の立場に関しては、日本と比べてスイスの方が保守的なのでは、という感想を抱いた。実際、スイスの女性が参政権を得たのは、1971年のことだ。長い間、女性は夫に従い、家庭を守っていればいいという考え方が主流を占めていたようだ。私が来た80年代前半でさえ、夫が家計を仕切っているところが多いと聞いた。妻は、夫から家計費をもらってやりくりするわけだ。日本では、外では夫を立てこそすれ、一般的に、家の中では妻がお金も含めて実権を握っている家庭を見てきた私には、それは驚きだった。

グラールス州エルム地方

スイスでは、職業見習い制度があって、男女共に職業を身につける。ただ、初めに述べたように、私が来た当時は、女性の場合は出産とともに、子育てのために家庭に入る人が多かった。それには、社会的仕組みから来

る理由もある。まず、保育園というものが少ない。また、スイスでは、日本のように学校給食がない。子供達はお昼に帰ってきて、家で昼ご飯を食べる。そして、午後また学校に出かけていく。低学年の場合は、午前の授業の始まりが日によって遅いこともあるし、帰ってくる時間が早い場合もある。また、どの学校も、水曜は午前中で授業がおしまいになる。つまり、学齢の子供が二人以上いる場合は、子供がそれぞれ出たり入ったりするので、母親はなかなか家をあけられないということだ。また、夫も、住んでいる地域で働いている人が多かったので、お昼には帰ってきて、家で昼食を取っていた。つまり、昼ご飯は、家族揃ってのメインの食事だったわけだ。だから、主婦は、午前中は買い物に料理に忙しかった。それから、もうひとつ印象深かったのは、「主婦」という言葉への意識について。これは、義母の影響もあるかもしれない。日本では、謙遜してのことか「ただの主婦」などと言う人もいるが、主婦の仕事が一つの専門職のようなものだということを、義母から学んだ。彼女は、当時の同世代の人がたいていそうであったように、20代の前半で結婚して家庭に入った。そして、プロの主婦として家政を一手に切り盛りしてきたのである。

その義母も十数年前に亡くなった。その前からすでに兆しを見せていた社会の変化は、21世紀を迎えて拍車がかかり、時代は大きく変わった。スイスに来たばかりの頃、「スイス人は急な変化を好まない」という言葉を知人から聞いたのを覚えている。けれども、そんなスイスにも、新自由主

義の波と情報革命の波が容赦なく押し寄せてきた。以前なら、子供が生まれてから義務教育が終わるまでは家にいて、その後、自分の職業に復帰できた女性たちも、急激な社会の変化によってそれが難しくなる。だから、たいていの女性は、母親になってからも、仕事を続ける道を選ぶ。そのためには、自分の親か夫の親の支援、あるいは、夫との家事育児の分担が必要になる。孫が生まれた知人たちを見ると、一週間に一度か二度孫の世話をしている人も多い。そうやってやりくりしながら、仕事と育児を両立させているようだ。ただ、そういう親がいない人は、なかなか難しい。学齢前は保育園に預けて、やがて学校に通うようになれば、日本の学童に当たるところに預けることになるが、これは収入によって費用が違ってくる。同じお昼ご飯でも値段に差が出るわけだが、それでも、特に専門職の人などは、高額になってもキャリア中断はしたくないのだろう。母親同士のネットワークでお互いに預けあって、交代に自宅でお昼を食べさせたりしている人もいる。いずれにしても、仕事と育児の両立には、いろいろとオーガナイズしなければならない。

この数十年の間に、変化を好まないと言われたスイスもずいぶんと変わってきた。家庭における男女の役割もそうだ。若い夫婦の間では、家事の分担も普通になってきている。昔に比べて、男女は平等に近づいてきたものの、一方で「期待される男性像」や「麗しき女性像」というものはまだ残っている。お互い「男はつらいよ」「女もたいへん」というところかもしれない。現実社会の変

化と意識の進化にはズレがあるものだ。今の時代、子供たちも変化の波に晒されている。子供は人類の未来だし、宝だ。それは、日本もスイスも世界もそうである。何よりも、子供への視点を忘れない社会でありたい。

対詠　ごきげんいかが？　PART 79 〈2021〉

O　小野澤繁雄
N　布宮　慈子
K　河村　郁子

傘をしてまでして歩く人少なまして年寄り出ている鴉　7月8日　O
傘さして応援してはならぬとふサッカー場に雨合羽あまた　7月15日　N
梅雨明けて晴雨兼用傘出せどショッピングカートに使ふことなし　7月28日　K
沼からでなく沼に下ってきたところ睡蓮の、鯉の沼ひとつの沼に　7月31日　O
最上川の洪水のためあるといふ大久保遊水地は役割果たしき　8月7日　N
梅雨明けのあと感染に観戦とせはしきままにはや秋たちぬ　8月20日　K
くしゃみしているそれは人でなく犬暑さのなかに秋風の吹く　8月25日　O
秋風の急に身に沁みサッカーの日本代表オマーンに敗れつ　9月2日　N

水道の水の温みに秋を知り「猛暑」の言ひ訳もはや効なし　9月3日　K
雨の日も雨のつづきも気疎くてとしよりしことのそれも一つか　9月7日　O
雨の日の次の青空うれしくて秋の光の中を歩きぬ　9月10日　N
東窓開けて陽光久しかり大日如来に両手（もろて）を合はす　9月15日　K
一つ屋（や）に囲われていて立派さは中松地蔵中松本町のもの　9月18日　O
上町（うはまち）の勢至（せいし）菩薩は山形十三仏霊場の第九番札所なり　9月28日　N
菩提寺は武蔵野三十三観音（くわんおん）霊場の一番なれどもはや巡れぬ　10月10日　K

前号作品短評A〈小野澤〉

●祈る手に蒼いマニキュアやませ吹く　　新野祐子

蒼、はくすんだ青のこと。ここでは、マニキュアの色で、祈る手のものでもあるところがポイント。これはアート、七句目の絵が青木さんのものなら、絵画か、そのなかのものだろうとおもう。やませ（吹く）とあるので、祈る手の、祈りの内容は人事ではなさそうだ。色にはなんらか自由さがあるので、この場面でも、よみどころとなる。山に関係する絵だろうか。

麦茶汲む肉食系の絵を見ては

肉食系の絵だという。大胆なところのある絵だろうか。そこで、そのあとで、麦茶汲む、となる、何か補色関係のような。言葉では、水を汲む、があった。会場に用意してあった麦茶だろうか。一つの納得でもある。

アマリリス館長の名は木草さん

木草さん、がいい。だが、こぐさ、では変換しない。変換は、きくさ、だろうか。名前にも不思議に納得するような場面がある。アマリリスは眼前か。週番日誌、に木暮先生、を間違って小暮先生としていて、受け取ってもらえなかったことを思いだした。（中学生のころ）

●病院に行くたび思ふ愛子さん、愛子さんちの愛想なき猫　　布宮慈子

黒白の猫は逃げずにゐるのみに懐くことなし愛子さんちの

病院にいくたびに（もういない）その人のことを思う、というのは、お見舞いにいった記憶から、だろうか。愛子さんちの、ちの、には、ワードで校閲の波線が入った。それでも、愛子さんちの猫、だ。タイトルは「愛子さんの猫」。愛子さんちの、黒白の猫、がくり返された。ち、は家。それは、どうしても愛子さんちの猫。われわれには、過去がある。そこに人がいて、猫もいる。いくらかはよいことのようにもみえるそのこと。それは、いのちのことでもある。

一連後半に名前も出ていて、デイジー。

うしろ二首は、その病院のパティオ。パティオの木陰、ベンチで息を吸う。空気感がある。

病院のパティオ明るくマスク顔に疲れし人がぽつぽつ出で来

やはらかな風吹いてくるベンチにて息を吸ふなりパティオの木陰

●オリンピックの聖火出発の映像にあやかりていま散歩に出でぬ　市川茂子

巣ごもりの日々で、散歩の意味もより積極的なものになっているが、ここでは何か出発をするような気息だ。オリンピックの、その年である。けれどもそれは、〈長閑（のどか）な日々〉にはなっていない。映像がすべてであり、その映像の一つにあやかる、という。また、数多の人がかかわってリレーがある。そのリレーにしても無事に着く日を待つという。こういう心持ちも作者のものである。

白梅紅梅、桜花の季節でもある。そこに（一連タイトル）「煩悩」をかさねている。

新緑に囲まれながら花のある墓園に通う夫（つま）の命日
思いやりあれど差し上ぐる物なきを「眼施（げんせ）」「心施（しんせ）」と仏典にあり

施す、ということにもいろいろな施し方がある、ことをしる。ひとつの辛さ。一日一日があるのだった。果てのない思い、とそのくり返しであることを、歌は言葉にしている。

前号作品短評B〈慈子〉

●思はざる検診結果くつきりと丸く小さき腫瘍を示す　梅津純子

「乳癌」顚末記、という題に驚きながら一連を読んだ。検査結果から、当然のように医師は手術の予定を入れようとする。患者としてはセカンドオピニオンを望むが、コロナ禍で治療が遅れるとの返事。決意して手術を受けた。手術の前も、手術後の病室にあっても心の中は揺れる。

『プレバト』に心泳がせ乳癌の術後三日の病室にあり

ふつうは手術後に傷が癒えていくと同時に、癌への恐怖感が薄れていくはずだ。しかし…。

「癌ではありませんでした」「えッ、そんなッ」腫瘍摘出退院七日後

誤診率数パーセントと告げざりし事を落ち度と医師平然と

細胞診の誤診率が数パーセント、ということか。一読者としても憤りを覚える。だが、現実に起きてしまったことだ。納得するまで、医師と向かい合うことはできたのだろうか。

●越冬の黒豆さやを弾け飛ぶ健やかなるはより遠くへと　大橋千佳子

春の喜びと勢いを感じさせる上の句に続き、下の句は豆が弾けていくさまを描写する。健康的な豆は遠くへ弾けていくとの発見は、何かを暗示させるようだ。

なんとまあ「製図を教えてください」と進級前の笑顔の君よ
早春の祖父との別れ語りつつ彼はスプリングコート地を裁つ

裁縫を教える専門学校での出来事か。進級の直前になって製図を教えてください、と悪びれもせずに言ってくる生徒。なんとまあ、とあきれ返るが憎めない。頼んでくるだけマシではないか。次の歌では、春の早い時期に祖父が亡くなったのだろう、生徒は手を動かしながら、なんとなくそのことを伝えたかった。スプリングコートという語が、春への決意を表しているようである。二首並んでいるが、笑顔の君と彼は同一人物かどうかはわからない。

●藤棚の下はベンチのあるところすわってそこは桂木隣り　　小野澤繁雄

公園の風景であろう。藤棚の下のベンチに座ってみると、隣には桂の木があった。見たままの描写である。カツラとわかったのは、木の名が表示してあったとも考えられる。

いつもの服というものがあることにしり合いが周回路半周が先
立ち歩き好きの犬にもあいたりきその説明は飼主がして

服で知人とわかり、公園の中を巡る道の半周先にいるのが見える。同じ時間に公園に足を運んでいると、顔見知りになる人がいる。そうすると挨拶くらいはするようになる。面白いものだ。立ち歩きをする珍しい犬にも会ったことがあり、飼主が理由を説明してくれた。日常の見聞きする事柄、そこにも人の意識が見え隠れしている。

●コロナ禍のさなかの天体ショーなれば皆既月蝕目に収めたし　　河村郁子

皆既月食（蝕）は太陽と地球と月が一直線に並び、満月が地球の影に完全に覆われる現象。ことしの五月二十六日はスーパームーンと呼ばれる、満月としては一年で最も地球に近づく日で、最も遠くにある満月と比べて見かけの直径が14パーセント大きく見える、ということだった。作者はパソコンとスマホを駆使して、その瞬間を見ようとする。

夕さりて巽（たつみ）の方の空見つめうす雲広ごりくるを憂ふ
しまらくを見つめてをれば蝕もどる半月は銀の光にもどる

夕さる（夕方になる）、巽（辰と巳との間。南東）、しまらく（しばらくの古形）など、古語を使い、天体ショーとの違和感を楽しむ。なかなか粋な作りである。

無二の会短信

◆此の頃は、気候変動や大気現象、猛残暑など、聞きなれない言葉の多い天気予報に一喜一憂しながら、不要の外出を慎んでいる。各地での豪雨で被災された多くの方々のご苦労を思うと、少しばかりの不自由など物の数ではない。世界の何処かで起こる風雨の災害など報道されているテレビを見ながら、何となく空の色や雲の流れは秋の天候に刻々と移ってゆくのを感じる。いつになったらコロナが終息するかと、根比べになりそうな予感もしている。

市川茂子

◆一九四三年生まれの私は、疎開した宮城県の山里で育った。文化的なものが周囲に無い中で、兄について男の子たちの中で遊び、木に登ったり飛び降りたりが楽しかった。中学、高校と軟式テニスをし、インターハイ出場は当然と思っていたが次第にコート上での対戦相手との心理的駆け引きが苦しくなり、球技は向いてないと感じた。高卒で働き始めた一九六〇年代半ばスキーブームが興り、一般人は自家用車を持たぬ時代に、日曜ごとに長いスキーを担ぎバスや電車を乗り継いで仙台から蔵王へ通った。スキーという二本の板を一人で、自分の身体能力と調和させ乗りこなしていくのが楽しかった。友人と比べても我ながら進歩が速く、初めてスキーに乗って二十八日目に一級を取得した。銀行の本部の仕事は上司の仕事の整理とお茶くみ、職場の花といわれる退屈な仕事をし、四～五年すれば、寿退職を期待される女の世界が虚しかった。

このたび東京オリンピックを観て、一人遊びのスケートボードこそが私の世界と感じた。原発爆発の放射能汚染を、アンダーコントロールと言い、フクシマを隠し無かったことにしてオリンピックを招致し、更にコロナ禍の猛反対の中での開催強行。かつて戦地慰問に駆り出された文化人たちは、戦後戦争協力者といわれ、人生の汚点を抱えた。オリンピックの選手たちの、そこに今ある姿に感情移入している私も、反対を叫び通している人たちからみればやはり戦争協力者につながるのだろうか。

梅津純子

◆世に明るい話題少なしといえど、短歌にしようと考えるとどんなテーマでも暗くなり、否が応でも悲観的な自分に気づいてしまいます。実生活は楽観に流れるのに、この矛盾。比較するものでもありませんが、パラ選手の逞しさと突き抜け感に勇気をもらえた気がします。

大橋千佳子

◆駅にいかなくなって久しい。駅がひどく遠くに感じられるようになった。駅までの（路線）バスにものらない。先日、たまたま歩いていて、駅の近くになった。橋上駅のそのあしもとになる歩き。駅には、電車が出入りしていた。それが、遠い過去のことのようにもみえた。東京とつながる

駅だが。近くのシネコンにもいく。歌会にも通った。エッセイの会にも。そういうことが一切なくなった。駅がよそよそしく、怖いようなものになっていた。どういう生活をしているか、しれるようだった。

小野澤繁雄

◆9月9日に中学生の稲刈りが終わった。自分たちの給食に出る米を中学生自身が刈っている。とてつもなく手が掛かる米作りのおいしい部分だけ体験させていいのかという議論もなされたが、しないよりはした方がいい。学校での勉強よりは人気なのだ。ジャージをどろどろに汚しながらの稲刈り。泥にまみれる経験など一生のうち最後の経験になるのでは…などと思ってしまった稲刈り体験であった。「泥跳ねし後も笑顔の刈田かな」

神村ふじを

◆TOKYO2020オリンピックとパラリンピックが無事終わった。コロナ禍パンデミックの最中に完了したのであるから、五輪史上のレジェンドの一つとして語り継がれるかもしれない。多くの感動ばかりでなく教訓も遺してくれた。ポストコロナの新しい世界の指針となるといいと思う。

私は、新型コロナとその変種の災禍に、不条理に対する先人の思索を辿りたいと思い、カフカ文学から江戸人の機知に至るまで本棚の所蔵の古本を手にした。その中に旧新約聖書のぶ厚い一冊があった。新約の黙示録を読むつもりであったが、旧約聖書の創世記に目が留まってしまった。差別

のない世界を望むが、まずは、戦争のない世界の実現を望むべきだと思う。

河村郁子

◆この夏は、世界のあちこちが異常気象に見舞われた。スイスでも、今年の夏は特別だった。大雨が降って、川が溢れたり湖の水かさが増して洪水になったり。例年に比べて、晴天の日が少なくて肌寒く、夏らしい日がほとんどなかった。南ヨーロッパでは、猛暑で山火事が猛威を振るった。実りの秋と言うが、今年は作物にも影響が出るのではと懸念している。一方、コロナ禍もまだまだ収束には遠い。フランスなどではすでに導入された、レストランや劇場・映画館などに入る際のワクチン証明書提示も検討されているところだ。ただ、スイスは民主主義が徹底している国なので、状況との兼ね合いを慎重に見極めているようである。いずれにしても、秋になって再び感染が広がらないことを願うばかりだ。

ギンジック恭子

◆八月七日、葉山の自然を守る会の仲間がトビタケ採りに山に向かった。車で白鷹町内の黒鴨林道を走っていると、終点近くになってから異様な光景が。法面に除草剤が撒かれ草が枯れているのだ。峠の駐車場はいつもならススキが生い茂っているのに、その形跡もない。ここから南方は一九八六年から四年かけて造られた一・六キロの大規模林道だ。国が計画した道路で、私たちが中心となった反対運動により建設が中止された。この先に道はない。町の管理となったこの舗装道路

の両側の草も赤茶色に枯れていた。誰が何のために除草剤を散布したのか、私たちは町長に対して公開質問状を送った。後日回答があり、町の農林課が維持管理のため、除草剤ラウンドアップを約七〇〇リットル散布したという。驚いたことに、山形森林管理署に除草剤の使用制限の規定はないのだと。一帯は朝日山地森林生態系保護地域に隣接している。私たちが管轄の東北森林管理局に問い合わせたところ、除草剤を撒くなどあってはならないとの返答だった。八月二十八日、私たち五人はジープと軽トラックに分乗し、数年整備されていないデコボコの黒鴨林道十六キロを片道一時間半かけて走り、現地を視察した。何と醜く無惨な眺めであることか。これ以上の暴挙を許してはならない。

新野祐子

◆友だちに誘われて、八ケ岳高原の友だちの別荘に一週間ほど滞在した。標高何メートルかは忘れてしまったが、ともかく涼しい。お天気わるければ真夏でも暖房が必要になるとか。それに緑が多いのもうれしい。だが夜は、生ごみを探しに猪が庭に来ることがあるので外に出ないように、と言われ、これには驚いてしまった。

松井淑子

編集後記

◆ギンジック恭子さんのエッセイ「スイス家庭事情の変遷」は興味深かった。以前うかがった事柄からは隔世の感があったからである。今回、子育ても含め、質実剛健なスイスの変化がとても面白く感じた。やはり世界は動いているのである。今号、新関伸也さんの〈近江気まぐれ文学抄〉はお休みです。

◆生まれ育った町で始まった「こども食堂」に参加している。が、コロナ禍でいまは休止中。当初からお年寄りもウェルカムで、名前には「地域食堂」を冠する。「食べること」「遊び学ぶこと」「居場所づくり」という理念を掲げている。二〇一九年四月に設立された地域食堂の活動は準備期間を経て、八月一日に第一回目を開いた。それから二週に一度、来る人も徐々に増え、時には地元の高校生のボランティアの参加もあって順調に回を重ねていくように思われた。しかし、中心になって活動していた副代表の女性Mさんの病気がわかり、半年の闘病ののち、帰らぬ人となった。並行するように、新型コロナウイルスが脅威となった。その後も消毒を徹底して食堂を開いていたが、いつも来てくれるお年寄りに何かあっては、とのことでしばらく休むことになった。

Mさんは県外から来た、いわゆる「よそ者」だった。よそ者にはしがらみがないぶん、思ったことを口にできる強さがある。生来の強い正義感と行動力により、地域でリーダーとして活躍してきた人だ。Mさんは湯浅誠さんのこども食堂の講習に参加し、数人で東京の池袋や山形市のこども食堂を見学に行き、さらに町長やすべての小学校・中学校へのあいさつと精力的に動いたという。

こども食堂の話を聞いたとき、すぐに手伝いを申し出た。自分の子育ての反省からである。東京郊外で子育てをしたわたしは、かなりの部分、友人や地域の人たちに助けてもらった。自分はなんとか乗り切ったものの、もっと心配な家庭があったのも事実。自治体の福祉からは漏れるような例だったかもしれない。あのときこども食堂があったなら、少しはお互いに楽に集まれたのではないか、と思う。せっかく始めた地域食堂、なんとか再開の道を探っていきたいものである。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景 103号
二〇二一 年十月二十日 発行
編集・発行人 布宮慈子
制作 スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright©2021 MUNINOKAI. All rights reserved.